

ISSN 2186 - 3989

福江充著『立山曼荼羅の成立と縁起・登山案内図』

岩田書院 2018年7月 A5版 393頁

富山県 [立山博物館] 学芸課主任 (学芸員) 加藤 基樹

北 陸 大 学 紀 要
第47号(2019年9月)抜刷

書評

福江充著『立山曼荼羅の成立と縁起・登山案内図』

岩田書院 2018年7月 A5版 393頁

富山県[立山博物館]学芸課主任(学芸員) 加藤 基樹



北陸霊山の一つ「立山」には、その立地景観を舞台に形成された山岳信仰の歴史があり、その唱導・布教の歴史とその内容については、多くの研究成果が蓄積されている。

富山県中新川郡立山町芦峯寺は、その信仰拠点の一つとして宗教集落に発展し、近世以降、広域に「立山信仰」の唱導・布教を展開したことで知られている。そして同地に昭和四十六年に建設された「立山風土記の丘」を平成三年に発展的解消し、新たに富山県[立山博物館]が整備された。著者の福江氏は、立山博物館の建設準備室から学芸員として勤務し、近年の「立山信仰」研究の分野を大いに牽引した。著者は、芦峯寺の民俗伝承を大切にしつつ、文献史料の整理から得た情報をもとに文献重視の立場をとったことで、従来の通説を深化させる膨大な業績を積み上げ、現在は北陸大学教授として活躍中である。福江氏の業績のなかでも立山芦峯寺衆徒の檀那場形成と廻檀配札活動に関する成果は大きく、すでに複数の著書が上梓されており、評者はもとより、「立山信仰史」の分野を研究する者にとっては必読の研究成果となっている。近刊には『立山信仰と三禪定』(A5判、四〇六頁、岩田書院、平成二十九年十一月)がある。この書は、本書に先行して上梓され、檀那場形成や廻檀配札活動の研究成果を踏まえて、その形成と展開の解明にさわめて有効とみる「三禪定」(富士山・立山・白山の三霊山巡礼の習俗)との関わりについて、史料的に考察したものである。いうまでもなく、現時点における三禪定の史料の決定版であり、「立山信仰」研究だけでなく、他の霊山研究や近世文化史、社会経済史的研究の分野にも資する興味深いデータが満載の一書である(評者の書評『日本歴史』第八四八号、平成三十一年一月、吉川弘文館)。

新刊となる本書『立山曼荼羅の成立と縁起・登山案内図』について、まず全体構成と内容について目次を全掲して確認するが、一瞥するだけでも節・項が細やかに設定され、まるで本書の索引機能を果たすかのような目次であることが伺えよう。

目次

序章 三禪定と木版立山登山案内図及び立山曼荼羅

はじめに／一、芦峯寺衆徒の東海地方での檀那場形成とその継続性／1、江戸時代初期における芦峯寺衆徒の東海地方での檀那場形成／2、鈴木正三の著書に見る江戸時代初期・前期の東海地

方からの立山参詣／3、昭和時代の戦前まで続いた東海地方の檀那場／二、芦峯寺衆徒の東海地方の檀那場と三禅定／三、三禅定がもたらした立山山麓・山中の整備／四、布橋灌頂会と東海地方の檀那場／1、江戸の檀那場における尾張国・三河国の大名と布橋灌頂会／2、布橋灌頂会に必要な白布の量／3、東海地方及び江戸の檀那場での白布の勧進とその意義／4、新川木綿と東海地方及び江戸の檀那場での白布の勧進／五、東海地方と立山曼荼羅・木版立山登山案内図

第一章 立山曼荼羅巡る重層的な社会構造

はじめに／一、立山曼荼羅の画像内容と形態／1、立山曼荼羅に描かれた図像／2、立山曼荼羅の形態・素材・制作時期／3、立山曼荼羅と蓮如上人絵伝との影響関係／二、立山曼荼羅を巡る社会構造／1、立山曼荼羅と廻檀配札活動・出開帳／2、宿坊家の家勢状況と立山曼荼羅／3、立山曼荼羅が江戸時代に多作された理由／4、加賀藩の立山衆徒への支配体制が生み出した立山曼荼羅の系統／三、立山曼荼羅諸本の制作環境／四、立山曼荼羅諸本の分類／おわりに

第二章 芦峯寺の立山縁起と木版登山案内図・立山曼荼羅

はじめに／一、芦峯寺一山及び宿坊家における由緒書・縁起・勧進記などの種類／二、芦峯寺の縁起と勧進記／三、由緒書・縁起・勧進記からの考察／1、寛政期から縁起や勧進記が増加する背景／2、各宿坊家の裁量で制作された縁起・勧進記／3、嬭尊「依存」から「脱」嬭尊／4、布橋大灌頂勧進記に対する着目点／立山大縁起「日光坊本」の特徴／芦峯寺系木版立山登山案内図と立山略縁起／史料の翻刻／1、芦峯寺日光坊「立山大縁起（芦峯嬭堂大縁起）」／2、芦峯寺日光坊「立山大縁起（神分）」／3、芦峯寺大仙坊「立山略縁起」／4、「立山略縁起 芦峯寺宝泉坊」／5、芦峯寺宝泉坊「立山略縁起」／6、芦峯寺「立山略縁起」／7、龍淵「立山本地阿弥陀如来略記」／8、芦峯寺宝泉坊「立山御嬭堂別当勧進記」／9、芦峯寺宝泉坊「勧進帖」／10、芦峯寺宝泉坊「布橋大灌頂勧進記」／11、醒眠「血盆経略縁起」／芦峯寺三学坊「越中立山血盆地獄血盆口経大縁起」／13、芦峯寺実相坊「流水大灌頂支證」／14、流水大灌頂の版木／15、立山中宮寺「永代大施餓鬼料菓」／16、立山中宮寺取次大仙坊「大施餓鬼菓」／17、「大施餓鬼法会勧進記」／18、芦峯寺宝泉坊「一千座護摩修行募縁」／19、立山芦峯寺「一千座護摩灰仏功德略記」／20、芦峯寺教蔵坊「純密護摩之妙行」／21、芦峯寺実相坊「茶牌之支證」／22、立山中宮寺「越中国立山兩大権現宝前永代常燈明供養勸化帳」／23、立山中宮寺権教「越中国立山御嬭尊壇鏡建立勸進簿 升や分」／24、芦峯寺吉祥坊「開山御宝前額再建寄付帳」／25、芦峯寺宝泉坊「立山御神前石鳥居造立万人講帳」／26、芦峯寺善道坊「立山参詣人蒲団施主記」／27、「證印 下行村新井権右衛門殿 立山宝伝坊」／28、「金仏建立證印 立山教蔵坊 観音地藏二尊建立證印」／29、「當鑄地藏尊支證 立山教蔵坊 金像地藏尊施財菓」

第三章 立山略縁起と立山曼荼羅—芦峯寺宝泉坊旧蔵本『立山縁起』の紹介と考察—／1、立山の縁起／2、芦峯寺宝泉坊旧蔵本『立山縁起』の書誌／3、芦峯寺宝泉坊について／4、宝泉坊旧蔵本『立山縁起』の要旨／5、他の「立山略縁起」との比較／6、宝泉坊旧蔵本『立山縁起』と布橋灌頂会／7、立山略縁起と立山曼荼羅／付 芦峯寺宝泉坊旧蔵本『立山縁起』翻刻

第四章 立山曼荼羅の成立過程に関する一考察—木版立山登山案内図から立山曼荼羅への展開—

はじめに／一、木版立山登山案内図「越中国立山禅定名所附図別当岩峯寺」／二、立山曼荼羅『市神神社本』／三、立山曼荼羅『広川家本』／四、立山曼荼羅『飯野家本』／五、立山曼荼羅『志鷹家本』／六、立山曼荼羅『富山県 [立山博物館] B本』／七、立山曼荼羅『桃源寺本』／八、木版登山案内図から立山曼荼羅への展開過程／1、成立時期／2、制作者／3、形態／4、色彩／5、版画から肉筆画へ／6、表題／7、道筋・川筋・方位／8、縁起文／9、文字注記／10、日輪・月輪／11、立山開山縁起や立山地獄の画像／12、阿弥陀如来と観音菩薩・勢至菩薩の三尊来迎／13、参詣者／14、『飯野家本』が示唆する今後の研究課題／おわりに

第五章 木版立山登山案内図と立山曼荼羅

はじめに／一、木版立山登山案内図「越中国立山図」について／二、内題概念の違い／1、立山の山絵図と木版の「越中国立山図」／2、「越中国立山図」から「越中国立山禅定並略御縁起名所附図」への内題の変化と立山略縁起・立山曼荼羅／三、立山衆徒に関する木版立山登山案内図の成立時期／四、木版立山登山案内図と立山曼荼羅／五、木版立山登山案内図の「立山曼荼羅」化／1、「越中国立山絵図之写」の内容／2、「越中国立山絵図之写」と立山曼荼羅の影響関係／3、「越中国立山絵図之写」と観行寺／おわりに

第六章 立山曼荼羅の絵解き再考—芦峯寺宝泉坊衆徒泰音の「知」と御絵伝（立山曼荼羅）招請に着眼して—

はじめに／一、立山曼荼羅の絵解きに関するイメージの形成過程／二、『立山手引草』の制作環境と立山曼荼羅／三、宝泉坊の檀家に見られる身分の多様性と老中松平乗全の立山曼荼羅／四、宝泉坊衆徒泰音の御絵伝（立山曼荼羅）招請／1、宝泉坊衆徒泰音の廻檀日記帳／2、立山曼荼羅を使用した勸進活動の実施回数／3、立山曼荼羅を示す呼称／4、立山曼荼羅を使用した勸進活動を示す呼称／5、立山曼荼羅を使用した勸進活動の儀式内容／6、特別な法事の際にも行われた招請／7、話題／8、布施・血印・散銭／9、世話人／五、宝泉坊の蔵書に見る衆徒泰音の教養／1、泰音に対するパーシヴァル・ローウェルの印象／2、宝泉坊の蔵書目録／3、寿信尼からの書籍の寄進／4、泰音の書籍購入／5、宝泉坊の蔵書に見られる諸縁起／6、芦峯寺実相坊の「話説」／7、泰音の能楽鑑賞／おわりに

第七章 芦峯寺教算坊が大坂で形成した檀那場と立山曼荼羅

はじめに／一、檀那帳の書誌／二、芦峯寺教算坊／三、檀那帳の内容／1、檀家数／2、配札地／3、檀家／4、頒布品／5、祈祷／四、檀那帳が使用された時期／五、立山曼荼羅『稻沢家本（教算坊旧蔵本）』／1、立山曼荼羅『稻沢家本（教算坊旧蔵本）』／2、文政初期に見られる三幅一對の立山曼荼羅／3、有楽斎長秀作『越中立山御絵図』／4、教算坊衆徒と有楽斎長秀作との接点／5、『稻沢家本（教算坊旧蔵本）』と有楽斎長秀作『越中立山御絵図』との模写関係／6、近江国からの立山参詣／おわりに

第八章 立山曼荼羅の図像を読み解く—目連救母説話図像と越中国南砺系チョンガレ台本—

1、立山曼荼羅／2、立山曼荼羅に描かれた目連救母説話図像／3、立山曼荼羅の絵解き台本『立山手引草』と目連救母説話／4、富山県南砺地方の盆踊りチョンガレ節の台本／5、立山曼荼羅の目連救母説話図像と南砺系「チョンガレ節・目連尊者」の共通性／6、富山県南砺地方に見る立山信仰の痕跡

付章 『流聞軒其方狂歌絵日記』所収「立山三尊開帳」に描かれた地獄絵と岩峯寺系立山曼荼羅参考資料1、立山曼荼羅諸本の解説／参考資料2、立山曼荼羅研究関係文献目録（一九三六年～二〇一七年）／初出一覧／あとがき

これまで「立山信仰史研究」の分野は、日本人の死生観や靈魂観を考える上で、「立山信仰」を研究素材として選び、その文献や民俗伝承が、ほぼ芦峯寺宿坊家のフィルターを介したものであったので、芦峯寺の価値観をベースとして、超時代的な山中他界観を中心とする信仰的世界観が無批判的に語られ拡散した。この呪縛のような「立山信仰」の枠組みは、いまだ解かれていない状況である。

その点、本書では立山曼荼羅の成立に関する議論やその「絵解き」の実態に対する理解について批判的な考証があり、先行研究を克服しようとする姿勢が示されているのが印象的である。もとよりこれこそが今日の「立山信仰史研究」に求められることであるので、一層その方法論と検証内容、そしてその精度が問われるところである。浅学ながら評者もその分野を志す一人として、今後の課題につなげるべく、以下では本書の各章ごとにその内容をなるべく批判的に、感想を交えて紹介したいと思う。

まず序章では、本書の目的について、「江戸時代初期にはすでに行われていた芦峯寺衆徒の東

海地方での檀那場形成及び廻檀配札活動、そしてそれと密接に結びついていた三禅定の習俗が、江戸時代初期から、芦峯寺一山の立山信仰世界を牽引するかたちで展開し、さらにその影響下で木版立山登山案内図と立山曼荼羅が成立したことを検証しようとするもの」と述べてられている。序章はこれまでの著者による業績を再編した新稿で、特に東海地方での立山芦峯寺衆徒の檀那場における継続性がありかつ篤い信仰状況は、立山・富士山・白山を巡礼するいわゆる「三禅定」習俗が深く関わっていることを、やや断定的に示した論考である。三禅定の一つに「立山」が入ることは「権威付け」であり、その巡礼の経路上（既存の三禅定の信仰圏）に檀那場が浸潤していったというのは、『立山信仰と三禅定』においても著者が主張してきたところである。しかし「権威付け」の議論は、遠隔地での布教においてその有効性が理解できるものの、「三禅定の信仰圏」と檀那場形成の議論については、東海地方の信仰状況では説得力をもつが、やはり疑問が残る。かかる主張は「加賀藩領外での「立山信仰」は、権威あった富士山信仰や白山信仰の地盤によって、やっとな受け入れられるもの」との主張にも読み替え可能であるだけに、唱導・布教者側の論理に各地の檀那場の住民たちがそれに幻惑されて形成された関係であるかのような誤解が生じるので、にわかに頷首しがたい。限られた史料から立山への参詣者の顔触れをみても、必ずしも三禅定の徒が大多数を占めているわけでもなく、また立山側の縁起や勸化文にも富士山や白山をことさらに絡めた言説ばかりが目立つというわけでもないからである。近世における立山登拝者の増加については、必ずしも三禅定習俗によるばかりではないと思われ、近世的立山信仰との質的関わりについては、さらに検討の余地があるだろう。

第一章は、「立山曼荼羅」諸本の整理をおこなったうえで、その図像的な差異が生じていることについて、それにかかわった人々の影響力の度合いであったとする。そして「立山曼荼羅」の成立は直接的に示唆する作品や文献史料がないことを理由に不明であるとしつつも、その展開については、幕藩体制下における加賀藩の立山衆徒に対する支配のあり方が大きな影響を与えたという。「立山曼荼羅」の次ぐ発見・確認の現場を踏んだ著者ならではの叙述・分類であり、細部にわたり大変興味深い論考である。しかしながら本章にはいくつかの疑問点があり、特に「立山曼荼羅」の図像解釈において、実質的制作者である絵師の知識が図柄の改変を左右したとの推論は、これを使用する現場と唱導の場などでの運用を考えると、布橋灌頂会の老婆の表現や阿弥陀来迎の図像などは、もう一步、観念論で意味的な思想的背景に絡む議論が必要であって絵師（制作者）だけの問題ではないものと思われる。

第二章は、本書の核となる章である。『立山大縁起』については、山吉頌平氏の論文（『富山史壇』所収、二〇一七年）にその成立をめぐる福江氏の見解に対し批判が挙げられたが、これを受けて修正がはかられている。また、立山に伝わる立山縁起や勸化文の諸本が一覧され、この分野に資する情報が綴られている。岩峯寺側の言説を除いて立山略縁起など二十九もの史料翻刻があり、立山縁起や勸化文の多様性がうかがわれて興味深い。ただ残念なのは、パンチミスによるものか、誤植がしばしばあり、やや信頼性を欠く。またそれぞれの史料に解題が付されておらず、立山縁起や布橋灌頂会以外の史料は、掲載意図も本書中で十分に示されていない。

第三章は、芦峯寺宝泉坊旧蔵本『立山縁起』を中心に、芦峯寺系略縁起の系譜についての考察である。これらが「立山曼荼羅」の絵解きの話材として、その参考資料とされていた可能性についての指摘は示唆に富んでいる。芦峯寺衆徒による「立山曼荼羅」の絵解きの場面について、第六章で従来の定説に言及するが、本章でも台本通りでなかった様子を示しており、基本的なシナリオだけが略縁起の形で制作・活用されたとし、同時期の他の霊場における略縁起も同様に使用されていることを想起すると、この推論について異論をはさむ余地はないだろう。

第四章は、木版立山登山案内図とこれとの模写関係がみられる「立山曼荼羅」諸本との図像比較分析が行われ、その重複率によって相互の影響関係の程度をはかる。なかでも「立山曼荼羅」が芦峯寺系、岩峯寺系に大別されるだけの分類にとどまらず、「飯野家本」のような「その他系」の存在を見出している点は、研究史的に見て大きな成果である。木版立山登山案内図から、鑑賞

のための肉筆の絵画が生まれ、それがさらに「立山曼荼羅」へと展開することが跡付けられている。ただ、かかる変容の歴史的必然性や機能論的な展開過程については、残念ながら判然としない。そもそも「立山曼荼羅」の概念自体が何であるのか、という問いも浮上してくるが、これに関する言及は備わらない。肉筆で大判の紙本に拡大模写して彩色を施し、軸装丁されたものは木版立山登山案内図よりも高価という意味で「立山曼荼羅」だという規定がなされているようである。ここでは「立山博物館E本」に関する言及は加わっていないが、「立山開山縁起絵」を核とする種類の「立山曼荼羅」に比して、あまりにも機能に差があり、同質のものとして論じることには抵抗がある。

第五章では、旧稿をもとに新出史料を位置付けなおし、加筆修正された論考として収められている。ただ、木版図と立山曼荼羅の相互影響関係を見ようとするあまり、刈谷市中央図書館所蔵木版図と著者架蔵の木版図に「立山曼荼羅」が影響を及ぼしたと推測するが、ここは別本の木版図を想定してもよく、立山衆徒の介在があったとしても、状況証拠によって「立山曼荼羅」からの影響を見るのは、やや論証不十分な印象を受けた。また第二章では山吉論文による「立山大縁起」の位置づけを受け入れて修正を加えているが、新稿の本章では、享保7年の木版立山登山案内図に関係する縁起文の存在の有無についてこれに言及されておらず、一貫性を欠いてしまっている。

第六章は、著者の業績の中でも、ひと際、輝かしい業績の一つである。江戸を檀那場とする宝泉坊の史料から、その活動の具体相を明らかにしたことで、幕末期における立山信仰を支えた芦峯寺衆徒の知識や教養レベルの見方が変わった点は、立山にとどまらず、全体史的な観点からも興味・関心をひく内容である。このことは『江戸城大奥と立山信仰』（法蔵館）をはじめ諸論文でも詳述されているが、本書における位置づけは、立山曼荼羅の絵解きについて、従来の画一的な研究方法、および平板的な研究成果に対する批判として収録されている。すなわち、台本のない絵解きの場が想定され、それを作り上げる教養に注目している。

第七章は、『立山信仰と三禅定』（第七章）とほぼ同文が再録されるが、一部、節や項の組み換えや史料引用に正確さが図られている。有楽斎長秀による木版図と旧教算坊本である稲沢家本との関係を近世大坂の檀那場をめぐって考察したものである。構図における影響関係が認められ、絵師有楽斎長秀との接点を求める研究は他所の事例にも適用可能であり興味深い。ただ、檀那帳分析によって「大坂での勧進布教は失敗に終わった」と結論付ける。しかし、実は勧進布教を怠ったり、失敗したりなどという事例を詳しく検討するほうが、序章で述べられていた三禅定習俗や経路論に位置づけをはかるものとみられる。この事例自体の読み方によっては、本書が目的とした課題ともかかわるので注意を要する結論といえよう。

第八章は、地域的な信仰習俗に基づくテキストとのかかわりに言及するもので、他の論考に比して少し方法が異なるものである。評者も「立山曼荼羅」に描かれた目連救母説話図像は最も重要な構図の一つと考えており、立山信仰史研究において重要な論考である。ただ、富山県南砺地方に伝わる「チョンガレ節・目連尊者」が、実は立山岩峯寺衆徒による布教活動によるものと結論付けるのは、近世には全国的に説話文学（『もくれんのそうし』や『目連記』など）を介して目連救母説話が知識人の間に広まっていたとみられることや、浄土真宗の三部経のうち『観無量寿経』に基づく講談・説教などで広く浸透していった可能性など複数の回路が想定されるのであり、やや無理があり論証不足であるように思われた。

そして最後は付章で岩峯寺の絵解きの実態がうかがわれるひとこまを紹介して本書を結んでいるが、本書全体の「結語」がないのはやはり残念である。しかし、巻末に参考資料が連なり、特に「立山曼荼羅研究関係文献目録」のような細やかな整理もまた、著者の功績の一つに挙げられよう。

もとより著者の研究成果は膨大であり、福江氏の仕事を賞賛することは容易い。しかしここでは、評者は著者の業績に多大なる学恩を被るだけの立場でありながら、「立山信仰史研究」にお

ける後進の一人としての自覚を奮い立たせ、本書の一つ一つの論考に対し、自戒を込めて、その内容に踏み込んで紹介してきた。その取りまとめにあたって論述が不足した部分を、挙げ足をとるようなことになったように思う。また著者が全霊を込めて執筆した論考を十分に理解できていない評者の力不足もある。言うまでも無く、本書は立山信仰の研究史上、きわめて重要な位置にあり、立山曼荼羅とは何かという問題意識が改めて高まった。各地の霊山霊場における勸進活動を考えるうえでも示唆に富み、研究者必読の書籍といえよう。